



# 艶めき剣戯

秘宝巡りと蜜色の巫女

天草白

挿絵 / asagiri

立ち読み版

KTC  
KILL TIME COMMUNICATION



Contents

## 目次

第一章	清楚な巫女は蜜色の肌……………	4
第二章	初心な乙女に性技指南……………	60
第三章	夜の屋敷で艶くらべ……………	115
第四章	廃寺で淫らな尋問……………	169
第五章	艶めく女体巡り……………	225
終章	それぞれの出立……………	281

## 登場人物

Characters

### 酒巻陶弥

(さかまき とうや)

脱藩浪人。仕官の口を求め、丸岡藩から加賀藩までやって来た青年。冷笑的な性格で女好き。かつて友人と想い人に苦杯を舐めさせられた過去を持つ。

### 千花

(ちか)

陶弥が立ち寄った加賀藩住吉神社の巫女。純情な性格をした清楚な美少女。女盗賊と浪人集団に神社の秘宝を奪われ、奪回のために陶弥とともに藩内を回る。

### 葉澄

(はずみ)

美貌の尼僧。住吉神社の近くの寺に住んでおり、時折千花の世話をしている。かつては武家の妻だったが、夫を失い尼となった。

### 桔梗

(ききょう)

秘宝を盗んだ女盗賊。その素性は加賀忍軍の末裔の渡世人。妖艶な美女で変装の達人、性技にも長けている。

### 占部武久

(うらべ たけひさ)

千花の神社を襲撃した浪人集団の頭領で、かなりの手練。

深々とした挿入を受けると、処女の膣洞は粘膜全体を細かく震わせ、おののいた。千花はほっそりとした両足を勢いよく跳ね上げて叫ぶ。

「きやあつ!? も、申しますから。まずはおやめくださいませ、陶弥さまっ……千花は、もうっ……ああん! あんっ、やああっ」

「本当に申すのだな、千花」

陶弥が舌をくねらせ、狭苦しい膣壺をかき回すと、ぐちゅっ、とあふれだした蜜が畳を濡らし、陶弥の顔にまで飛び散って、ふん、と乙女の匂いを発散した。

羞じらいの悲鳴とは裏腹に、巫女の秘所はますます潤いを増し、いまや陶弥が内部で舌をくねらせるたびに、ぴちやり、ぴちやり、と蜜液の音を強く響かせ、粘膜全体がしっとり水気を含んでいた。

「ふん、清纯そうな顔をしている割にはなかなか早熟よ」

陶弥がうなった。

「お願いです、陶弥さま。もうお許しくださいませ。意地悪は……」

ほとんど洪水に近い状態となっている秘処から顔をあげると、はあ、はあ、と荒い呼吸を繰り返す巫女少女に視線を向ける。

「五年ほど前から、です」

千花は観念したように消え入りそうな声で告げると、両手で顔を覆い、おえつ嗚咽をもらした。

巫女の身体がこれほどの感度を備えているのは、幾度も行った自慰行為によって自然と秘処が開発されていたからなのだろう。とはいえ、千花が類まれなる豊かな性感を備えていることに変わりはない。

陶弥は白い小袖の上から胸元へ手を這わせると、華奢な身体つきからは信じられないほどたっぷりと柔肉の詰まった乳房を荒々しく握り締めた。

「んっ！」

千花は瞳を閉じたまま鼻にかかったような嬌声をこぼす。

陶弥の指先を避けようと身体をよじらせているが、千花の表情に嫌悪の色はなかった。性悦に染まり始めている自分自身への戸惑い——白い相貌には、初めて性に触れた生娘独特の表情が浮かんでいた。

「千花……」

陶弥は千花の顎に手をかけて、可愛らしい相貌を上向かせた。かすかに濡れた唇は半ば開いていて、綺麗な歯列と赤々とした舌とがのぞいていた。

陶弥が唇を寄せると、千花はハッと目を見開いて顔を逸らした。

「だ、だめ」

唇を真一文字に引き結び、垂れ目がちの瞳を揺らしながらも、その奥に輝く光は断固たる拒絶の意志を示していた。

「互いに恋焦がれあう関係ではないゆえ、唇だけは許さぬというわけか。ならばこちらはどうかな？」

陶弥が千花の秘処へ手を伸ばした。

ヌルヌルとした秘唇に指先が触れたとたん、ぐちゆり、と濁った水音が響き、肉層の奥からはトロリとした粘液が後から後からこぼれ落ちる。

卑猥な音と感触とが、十八歳の少女の身も心もすでに十二分に高ぶりきっていることを知らせていた。

「これほどの女を見過ごすことなどできぬ。お前が欲しいのだ、千花」

陶弥は正面から美しい巫女少女の顔をのぞきこんだ。

涙に濡れた黒い瞳がゆつくりと閉じ、形の良い唇からは諦めたような、深い吐息がこぼれた。

「いけないお方。強引に……。ああ、千花は……。千花は神に背きます。どうか、お許しを……」

千花は切なげにあえぐと、陶弥の肩から離れた手を床の上へ静かに置く。

陶弥がゆつくりと上体を起こしたところで、二人の視線が正面からぶつかりあった。「や、優しくしてくださいませ」

消え入りそうな声で懇願した十八歳の少女の儂はかなげな美貌は眉間が陰しく寄り、頬が小刻みに震え、唇は血の気を失って青ざめ……不安げな表情が色濃く浮かんでいた。

「俺に任せておれ。きっちりと濡らしておけば、処女とはいえそれほど痛くはない」陶弥は千花の頬や耳朶に優しく何度も口づけした。相手を落ち着かせるために、滑らかな背中を何度も撫でる。

今までの強引な責めとは一転、千花の肌のいたるところに口づけを繰り返しながら、畳の上へそつと巫女の肢体を横たえる。

「や、優しくしてくださいませ。初めて、ですから」

かすかなため息をもらす千花を見下ろし、陶弥はすらりと長い両足を押し開いた。開脚の角度が大きくなるにつれ、肉づきの薄い太ももの間に隠れていた神秘の花園が徐々に明らかになっていく。

処女の秘処が完全にあらわになった瞬間、陶弥は我知らず感嘆のため息をもらした。ぐん、と肉根が今以上の勃起反応を示し、高角度に反り上がると、先端部が臍へそにく

つついた。陶弥の欲望器官はまるでそれ自体が意志を持つつかのように、眼前でたたずむ未通の秘処に入りたがっている。

「入れるぞ」

短く宣言して、陶弥は千花の両足の間に腰を進めた。張り詰めた切っ先を巫女の中心部にあてがうと、互いの性器粘膜が接触し、人の身体の一部とは思えないほど高い熱を孕んだ感触が亀頭部につたわった。

グッと力を入れて沈める。ぴったりと口を閉じた花弁を、力をこめて押し開きながら、先走りの液を滴らせる先端がわずかに千花の内部へと潜りこんだ。

「あんっ……はあ、あああっ……!!」

ほんの数寸押しこんただけで、すさまじいまでの抵抗感が亀頭全体を押し返そうとするのは処女ならではの感触だ。

「っ……あああっ……!!」

千花が断続的な悲鳴をもらし、しなやかな身体を弓なりに反らせた。

わずかにめりこんだ亀頭部を体外にはじき出されそうになり、陶弥は腰にグッと力を入れて踏ん張ると、さらに前へと押し進めた。反発の強い粘膜をねじ伏せるように体重をかけて、たぎりきった逸物を埋めこんでいく。

「さすがに、硬いな」

久しぶりに味わう処女肉の生硬さに陶弥はうめいた。

処女の膣粘膜は四方から陶弥の肉根を食い締め、頑強に抵抗する。入り口をこじ開けた肉棒を、奥に向かって一寸進めるだけでも一苦労だ。ぎゅうぎゅうに詰まった膣肉を強引に広げるようにして、陶弥は肉棒を押し進めた。

「お、大きすぎます、陶弥さまっ……こんなっ……ああんっ……!」

千花は眉間に深く皺を寄せ、可愛らしい顔を険しく歪ませた。

「もう一息だ。気張れよ、千花っ」

清らかな巫女の処女を今まさに奪おうとしているのだ、と思うと、経験豊富な陶弥といえども荒々しい衝動を抑えきれず、強引に腰を押しこみながら吼えた。

膣孔の途中で、肉棒が引っかかるような感覚があった。充血した亀頭部で、行く手を塞ぐように迫り出している出っ張りの存在を確認すると、

「が、あっ!」

陶弥はひととき大きな雄たけびをあげて、全体重を下腹部にこめた。

みち、と羅紗ラシャが裂けるような感触がして、同時に一番狭いところを突破した陶弥はそのまま千花の最奥にまで己の剛棒を突き入れた。

「きやあ……ああ……あつ」

切れ切れの悲鳴とともに、千花が少女から女になった産声うぶごゑをあげた。

キツキツの膣内に陶弥の剛棒が付け根まで嵌まっていた。貫通した感触は心地よく、同時に清純無垢な巫女の初めてを奪ったのだ、という征服感がこみあげる。

類まれな可憐さを備えた少女の、最初の男になれた——極上の感慨が陶弥の胸を陶酔させる。

わぼろ臙に差しこむ月明かりに照らされ、千花の太ももの辺りが青白い輝きを宿した。両足の付け根には陶弥の巨根が深々と嵌まり、大きく押し広げられた膣穴の端から、薄桃色の鮮血がひと筋こぼれ落ちていた。

「大丈夫か、千花」

陶弥が処女の身体を氣遣うと、千花は上体をわずかに上げて弱々しくうなずいた。前戯の段階で散々濡らしておいたためか、あるいは千花の身体が思った以上に成熟していたのか、破瓜の痛みはそこまでひどくはないらしい。

陶弥は千花の細くくびれた腰を両手でつかみ、己の腰に向かって引き寄せた。ずん、ずん、と肉刀の切っ先で膣底を突き上げるようにして挿送を開始する。

「うっ、く、んっ!! やああつ……!!」



「ううっ！ よいぞ、葉澄。その調子で続けるのだ」

傲岸に見下ろす陶弥の視線と上目遣いに見上げる葉澄の視線がぶつかりあい、中空で火花を散らす。形こそ葉澄が陶弥に口奉仕をしている格好だが、尼僧の眼光はまったく衰えておらず、むしろ親の仇でも見るかのような憎々しげな目つきで陶弥をにらみ続けていた。

「いい目だ。それでこそ屈服させる甲斐があるというもの」

陶弥は葉澄の僧帽を片手でつかみ、指先を頭部に引っかけてしっかりと固定すると、力をこめて葉澄の顔を前後に揺らし始めた。

「ウツ……ムゲツ!!」

さすがに驚いたのか、葉澄は喉の奥でぐぐもった苦鳴をもらした。

陶弥は、といえば尼僧の顔に無理やり加えている前後運動をますます活発化させ、葉澄の柔らかな口腔を女性器に見立てて、強烈な抽送を繰り返していく。

今までとは比較にならないほど速く、強く、葉澄の口内へ猛った肉柱を突き立てるたびに、葉澄は鼻腔からかすかな苦息をもらし、口の端から唾液の飛沫をこぼした。

「むぐっ、は、むうっ」

口の中に溜まった唾液が潤滑油の役目を果たし、陶弥は葉澄の口内で肉棒を滑らか

に出し入れすることができた。

葉澄にとつては、こうして陶弥に強要されている奉仕行為ですらも反撃の機を窺うための演技に過ぎないのかもしれない。

（気の強い女だ。下手をすれば俺のほうが逸物を噛み切られかねんな）

陶弥が想像した以上に、美貌の尼僧は口唇奉仕の技巧に長けていた。経験豊富な桔梗と比べてもなんら遜色のない巧みな舌遣いで、男根の先端から竿の裏筋に沿ってねつとりと舌を走らせる。

陶弥はジーンと腰骨を震わせる愉悅の稲妻に撃たれ、高まる射精衝動に逆らわずに両下肢を踏ん張った。

「おおっ、出さず葉澄！ 出してやるぞっ！」

尼僧の口の中を内部から押し広げるように、怒濤のごとく増した血流によって、どくん、どくん、と不規則な脈動を繰り返す肉棒が鎌首をもたげた。暴れ馬を思わせる勢いで肉棒が跳ね回る。

「ンッ……ア、ハアア……！」

勢いが強すぎて葉澄の口から飛び出した逸物は、そのまま二度、三度と上下すると頂点に達した肉悦とともにぱつくりと開いた鈴口から、おびただしい量の欲望液を噴

出した。

「あ、熱ッ……！ 嫌ア、顔にッ……！ こ、この私の顔に……浪人ごときの、汚らわしい子種が……アア！」

忌々しげに叫びながらも、尼僧の怜悯な美貌にはどこか恍惚とした表情が浮かんでいた。

すさまじい勢いで飛び出した白濁は空中で弧を描き、葉澄の美しい額や頬、スツと通った鼻梁から赤々と濡れた唇にまで、いたるところに命中し、整った顔だちを淫靡な色合いに染め上げた。

葉澄は弱々しい足取りでふらふらと立ち上がる。

疲労と屈辱であえぐ尼僧に対し、陶弥はなおも淫らな責めを敢行しようと、身を屈めた。白い襦袢の裾をまくり、股間を大きく露出させると、長らく男の目にさらされていけないであろう神秘の園をまじまじとのぞきこんだ。

「くっ……！」

葉澄はわずかに身じろぎするが、素早く背後に回りこんだ桔梗が上半身を抱え、さらにもつちりとした両の太ももを陶弥が力づくで押さえこんでいるため、それ以上の身動きが取れない状態だ。

葉澄の秘処はさすがに三十代という年齢にふさわしく、千花のような瑞々しい秘処に比べると色素が濃く、淫らがましい濃赤色に彩られていた。黒々と繁った陰毛が熟れた肉裂の上部を菱形状に覆う。

「俗世間から隔絶された尼僧といえども、ここはしっかりと女を主張しておるな。ふむ、まだまだ洩れてはおらぬようだ」

想像以上にムンムンとした色香にあふれ、濃密な牝の香りを漂わせる肉厚の秘唇を目の当たりにし、陶弥は感嘆の声をあげた。

ふつくらと豊かに盛り上がった肉裂を指の腹でそつと撫でると、むっちりとした厚みと弾力を感じた。プリプリと脂の乗った感触が心地よい。

葉澄は不快そうにまなじりを吊り上げ、陶弥をにらみ続けた。

「いくら身体を弄られようと私は屈さぬぞ」

「ふん、ここを責められるとも思ったのか？ だとしたら甘い考えに過ぎるぞ、葉澄。俺が狙っているのは——ここだ！」

おもむろに葉澄の身体をひっくり返すと、今までとは逆に、陶弥が尼僧の背後に、桔梗が尼僧の前方に、それぞれ位置を入れ替えた。

陶弥の眼前には迫力たつぷりに左右に張り出した双臀が鎮座しており、脂の乗りき

つた二つの尻の丘は豊饒そのものだ。

「ほう」

数多あまたの女を抱いてきた陶弥だが、これほど見事な尻を目にするの初めてで、思わず嘆息をもらした。深い尻の谷間に両手の指先をかけて、ぐい、と左右に割り開くと、周囲の肌比べて幾分色彩のくすんだ葦色すわれの窄まりが姿を現す。

いかにも熟れた女らしく皺の多い、円環部がわずかに盛り上がった菊穴は、ひく、ひく、とかすかな痙攣を繰り返していた。

陶弥が綺麗な円周に沿って指先を這わせる。

「やめよ、恥知らずめっ！ 不浄の場所を指で……アアッ!!」

葉澄の悲鳴がひととき大きくなり、ふくよかな尻肉は小刻みに震えながら上下に揺れ弾んだ。

「やはりな。ここを他人に触れられるのは初めてと見える」

「あ、当たり前であろう！ それ以上は言うでない、酒卷陶弥!」

葉澄は首を激しく左右に振って、無頼な浪人に怒声を浴びせた。

放射状の皺の一本一本が小刻みに震え続けているのを見下ろしながら、陶弥はその震えの中心点にある小さな穴に指の腹を乗せた。ぐっ、と圧迫すると、弾力のある窄

まりがわずかに窪み、葉澄が小さな悲鳴をもらした。

「触るな、と申しておるのだ！ 恥を知れえっ！」

尼僧の悲鳴が、陶弥の耳には心地よかった。気高く、苛烈な気性の尼僧をこうして性の魔悦によって屈服させてやるのは、男として極上の征服感をあおってくれる。

陶弥は円形の窄まりを中心にして、指の腹を螺旋状らせんの軌道に動かしながら、尻穴とその周辺の皺を撫でさすった。

いかに未亡人の葉澄といえど、排泄器官を愛撫されるのは初めての経験だ。けっして強い力はこめず、少しずつ圧力を増していく感じで、陶弥は指先を使って丹念に菊孔の表面を柔らかくほぐしていった。

「あたしも……んっ……こつちを可愛がつて……む、ちゅうっ……」

その間に、桔梗が跪いて葉澄の股間に顔を寄せ、赤い舌をうねらせながら熟れた秘唇を愛撫する。肉厚の秘裂を上下にさすったかと思えば、包皮に包まれた肉芽をコロコロと転がしている。

陶弥のほうからははつきりとその動きは見えないが、男はもちろん女の性感も心得ているであろう桔梗のことだ、的確に葉澄の秘処を口唇愛撫しているに違いない。

前の穴を桔梗に、後ろの穴を陶弥に——屈辱的な二穴責めを受ける尼僧は、次第に

抵抗の声も弱まり、それどころかむつちりと豊かな腰を左右によじらせ、ひっきりなしにあえぎ始める。

「ウグッ、グウウッ……わ、私は……アンッ」

肉悦で白い相貌を薔薇色に染めながらも、葉澄の黒瞳は意志の光をいささかも色褪せさせず、陶弥と桔梗をにらんでいる。

「この程度で屈服するような女ではない、か」

陶弥はさらなる恥辱を与え、同時に背徳的な快楽をも味わわせようと、今度は葦色の菊穴に唇を直接触れて、口唇愛撫を始めた。ふうっ、と細く長い吐息を肛門の奥に吹きこんでは唾液を注ぎこみ、まだ生硬な腸粘膜に浸透させて柔らかく蕩かせていく。

「ンッ！　ンンッ！　やめよ、と申しておるのだ、酒巻陶弥ッ！」

葉澄が示す拒絶の態度もまた、今まで以上に頑強なものへと変わった。

（——ふん、すでにお前は堕ち始めておるのだ、葉澄）

それは陶弥にとって狙いどおりの展開だった。排泄の場所を男に舐められ、口と舌で賞味される、という女にとって最大級の屈辱的な行為は、葉澄の誇りをズタズタに引き裂いたはずだ。

「ほぐれてきたな。そろそろ頃合であろう」

「頃合、だと？」

訝しげな葉澄に対し、陶弥は傲慢な口調で言い放った。

「尻の穴に俺の逸物をくわえこませてやろうというのだ。神仏に代わって、この俺が罰を下してやろう」

「ば、馬鹿な、そのような場所を……あり得ぬっ！」

葉澄が伶俐な美貌を動揺で歪めた。

陶弥は荒んだ笑みをもらしつつ、尼僧の尻肉を抱えこみ、ムチムチと張り詰めた球形の表面にグッと指先を食いこませた。三十代前半という年齢相応に脂が乗りきった左右の尻肉は、指に力をこめればこめた分だけ、指先が柔らかく沈んでいく。

「許さぬぞ、酒卷陶弥！ お前ごときがこの私に——うぐううっ」

拒絶の声も、無頼の浪人にはどこ吹く風であった。

扁平に変形させた尻肉を驚づかみにし、尼僧の臀部を強引に引き寄せた陶弥は、力任せに引き倒し、葉澄に四つん這いの体勢を取らせる。いきりたった肉棒を莖色の窄まりにあてがい、下腹をグッと沈めた。

「んっ……ぐううっ！」

未亡人尼僧の豊満な肢体が大きくしなり、震える喉から断末魔を思わせる絶叫がこ

ぼれた。

前の穴とは違い、さすがに未通の肛穴は抵抗感が強く、陶弥の剛棒を容易には呑みこんでくれなかった。繊細な直腸粘膜を傷つけないよう細心の注意を払いながら、陶弥は寸刻みに肉棒を押し進める。

「なんとという破廉恥な真似を……!!」

こちらを振り向いた葉澄の顔は憤怒の朱に染まっていた。

「ふん、尻の穴で感じておるのか。神仏に仕える尼僧が随分と罰<sup>ばち</sup>当たりなことだ。この破戒僧め」

「だ、黙らぬか！ 感じておるはずが——ああっ」

すでに肉柱の半ばまでをヌメヌメとうごめく腸洞に埋めこんでいた陶弥は、ここぞとばかりに腰の力を解放し、残り半分を一気に差しこもうとたたみかけた。挿入の衝撃で、尼僧の尻肉が鞠を思わせる弾力豊かな動きで上下に跳ねる。

次の瞬間、陶弥の太ももにも葉澄の双臂がぶつかり、肉柱の先端から根元までが深々と尻の中に埋まりこんだ。

「くく。こちらの生娘は俺がもらってやったぞ、葉澄。薄汚い浪人風情に初めてを奪われた感想はどうだ」

「卑劣な……!!」

葉澄は燃えるような視線を陶弥にたたきつけ、肉づきの豊かな下腹部をワナワナと震わせていた。さすがに未通の肛穴は狭く、肉棒を食い締められる感覚は膣孔とは比較にならないほどキツイ。

陶弥は顔をしかめながら動き出した。

張り出した雁首で、ツルツルとした腸壁をゆつくりとこすり、ときには腰を左右にねじり、少しずつ尼僧の腸内を拡張していく。

「抜けッ、抜かぬかッ!」

肛門の処女を奪われながら、なおも葉澄は抵抗を諦めていないらしく、ひっきりなしにわめきたてては、なんとか結合を外そうと尻肉を力強く振り乱した。

せつかく未通の肛穴を貫いたというのに、そうそうにその感慨を失ってはたまらない。陶弥はあらためて尼僧の双臀をつかみなおし、しっかりと固定してから抽送を続けた。

眼下で躍動的に弾む左右の尻丘を見下ろしていると、あらためて葉澄の『初めて』を奪ったのだという征服感が胸に満ちる。

「ウッ、くう……おのれエ」

どうあがいても排泄器官から肉棒を抜いてもらえないことを悟ったのか、葉澄は肉づき豊かな上半身を床の上に突っ伏し、悔しげにうなつた。

むっちりとした尻の合わせ目に腰を打ちこみ、最奥にまで肉棒を差し入れるたびに、雄大な尻肉がぷるっ、ぷるっ、と痙攣しながら揺れた。狭苦しい直腸壁は、さすがに陶弥が根気強く挿送を繰り返し、野太い男根で内部を丁寧にまさぐりながら徐々に拡張していったことで、とろみを増し始めた。

粘ついた腸液を肉棒の表皮にまとわりつかせ、陶弥は尻穴の奥深くにまで剛棒をたたきこみ、葉澄の排泄器官を第二の性器として開発していく。

「アアッ、嫌ッ！」

すでに葉澄は肛門をえぐられる苦しみを感じていないはずだが、だからこそ逆に屈辱感が増すのかもしれない。脂の乗りきった豊臀を振りたくり、苦しげな呼気まじりに、気位の高い未亡人尼僧があえいだ。

「本当に嫌なのか」

振り返った葉澄の表情は明らかなかわばりを見せた。

陶弥は、あらためて葉澄の身体の芯に到達するまで深々と己の剛棒を差しこみなおした。

「はっ……アアッ、ああああ……アアンツ」

葉澄の声から陰が取れ、柔らかな女の声へと変貌するのを聞き取り、陶弥は眼光を鋭く輝かせた。

「陶弥さま、一人で楽しんでないであたしも混ぜてちょうだい。見ているだけでは生殺しも同じだわ、ふふふ」

桔梗が妖しく微笑しながら、肛門を使って獣の体位で交わる二人に身体を寄せてきた。彼女もまた葉澄の変貌に気づいたのだろう。

唾液の滴る赤い舌を、陶弥と葉澄がつながりあっている結合部に向かって伸ばし、ぬらりと軽く舐める。

桔梗はさらに身体を屈め、陶弥の肉棒や葉澄の肛門周辺に、ちゅっ、ちゅっ、と音を立てて口づけを繰り返すと、丸く広がった肛輪に沿って指と舌を交互に使いながら圧迫した。

「ア、ンツ！」

葉澄の嬌声が一段と高くなった。肉棒で刺し貫かれてパンパンに伸び広がっている菊穴を、女のツボを知り尽くした桔梗によってさらに責められていた。

陶弥が全体重をたたきつけるような律動を立て続けに繰り返りだし、尼僧の尻穴をえぐ

る。同時に、桔梗が妖しく舌をくねらせて尼僧の尻穴をなぶる。

「な、なぜ……!!? こんな薄汚い浪人に、私が……」

二人がかりの責めによって、葉澄の声色は明らかに変わり始めた。乱れた僧衣の合わせ目からのぞく白い肌はいつの間にか薔薇色に紅潮し、びっしりと珠の汗を浮かべている。

「アア、ン……なのに、どうし……て……ハアアッ!!」

白い僧帽をかぶった頭を左右に揺らし、怜悯な美貌を驚愕に歪ませながら葉澄がぁえぐ。

陶弥は肉づきのよい尻たぶを驚づかみにしてユサユサと揺さぶり、尻肉全体を振動させた。一方で菊孔を貫く動きもさらに加速させ、尼僧の臀の性感帯すべてに刺激を与えていく。

「く、ううっ。許さぬぞ、酒巻陶弥」

それでもなお葉澄は豊かな双臀を振りたくり、結合を解こうと抵抗した。

陶弥はフツと力を抜き、おもむろに腰の動きを止めた。

「なっ……!!?」

「陶弥さま?」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! 19日発売!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのパックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のお愉快的Blogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!